労協連だより

古村　伸宏

分野を超えた「全国よい仕事研究交流集会」(10/16～17)が大成功に終わった。協同労働の法制化を待望する声が広がる一方で、まだまだ協同労働の現実は知られていない。協同労働がつくり出す仕事の質と労働者の発達可能性、そして職場の文化は、明らかに雇用労働とは異なる。今回の集会には、各分野の研究者や自治体関係者が、数多く分散会のコメンテーターとして参加いただいた。初めてといえる協同労働の実践レポートに触れ、多くの方が「協同労働」について認識を深めていただいたと確信している。その実感が、また一回り大きな協同労働の「待望論」を発してくれるにちがいない。

そんな躍動感が広がる一方で、横浜市・泉寿荘と大野城市・学童保育所が、相次いで指定管理の更新がならないという、憤りを覚える出来事が起こった。共に、協同労働・３つの協同が最も進んだ事業所とされていた。今回のことで、我々に突きつけられた課題はあるが、それ以上に指定管理者という制度とは、公共とは何か、をあらためて問い質す重要な局面を迎えたと感じる。今回は特に、選定のあり方と評価のあり方についての疑義であるが、それ以上に、こうした制度がどんな目的で始まり、そして「新しい公共」と持て囃されている理念との整合を問わないまま、事態はより深刻に劣化しているのではないか。公共とは何か、それを市民が担うとはどういうことか、を鋭く突きつけられている。

今年度から始まった「地域労協会議」の２回目が開かれた(10/25～26)。センター事業団に比べ、飛躍と発展が遅れがちだった地域労協にも、変化が生まれている。自治体との関係を通じて、新しい事業に挑戦する機運は高まってきた。特に、地域の困難に向き合おうとする挑戦は、生活保護受給者の自立支援や環境の再生などで成果をあげつつある。一方で、こうした可能性を全組合員が主体的に受け止め、３つの協同の観点を磨いていくには、今一歩の苦労が伴うだろう。しかし、センター事業団一辺倒ではない、個性豊かな地域労協が、３つの協同に裏打ちされた新しい発展を遂げていくことが、協同労働運動を分厚く多様な広がりを得ていくことになるだろう。後に続く新しい法制化時代の労協に対する、個性あふれるモデルづくりとして、この流れを強めていきたい。

いよいよ全国協同集会in四国が数日後に迫った。今回の協同集会の本当の正念場は、集会後から年度内にかけて、各県実行委員会がどのようなネットワーク組織として継続・発展していくか、ということだ。集会の成果を、「持続可能な仕事おこしと地域づくり」のプラン・企画にまとめ、自治体や地域に発信し、その実践を実行委員会が主体になって進められるかどうかである。その条件は整いつつある。必要なのは、その強い呼びかけを我々が発することができ

るかどうか、という覚悟である。全国の実感を総動員して、「四国の覚悟」を示していきたい。

研究所だより

榎本　木綿

四国での協同集会もいよいよ間近に迫り、準備も佳境に入っています。先日、集会前の最後の実行委員会が開かれたのに併せ、集会参加呼びかけに皆で訪問活動を行い、その際に高松市役所各課へも伺いました。当日はちょうど生活保護費の受給日と重なり、生活保護課はたくさんの人たちが列をなし、溢れ返っていました。職員の方々も増員して対応している様子でしたが追いつかないようで、普段こうした場に関わらない者にとっては情報や知識ではない現実を目の前にし、やはり少なからず動揺を覚えました。この中には仕事をしたいと思いながらもどうにも叶わないでいる人がたくさんいるはずであり、どうにか生活を立て直したいという思いを摘んでしまわないような支援体制の確立が早急に必要だと実感しました。

そうした意味でも本誌今号の特集にある埼玉県で開始された「生活保護受給者チャレンジ支援事業」には大きな期待を寄せています。就労だけではなく生活全般を網羅した当事者に寄り添う支援体制はいままでのような縦割りの支援制度のあり方では不可能でしょう。今後はいかに市民、地域、行政がネットワーク化して支援体制を整えていくか、そこをつなげる役割の一つをワーカーズコープはどう果たしていくのか、また当事者にとって、「働く」ということについて何が本当に必要であり、展望を創り上げていけるのか、ワーカーズコープの事業、運動の面からもさまざまに問われるまさに挑戦だと思います。

挑戦つながりというには少々話が飛びますが、飯能にある「野口種苗研究所」の野口勲さんを訪ねました。知る人ぞ知る「野口のたね」の代表です。野口さんは手塚治虫担当の虫プロ編集者というキャリアを持ち、その後、家業の種屋を継がれたそうで、農家が使う野菜の種が「F１種（１代目のみ収量や生育が早まるよう交配された種）」が主流になりつつあるなかで、何世代にも渡り地域の農家が自家採種で伝えてきた「固定種」を次世代に残そうと奮闘されています。

F１種は「雄性不稔（葯や雄しべがない突然変異の株）」を利用しつくられており、人間を含めそれがもつ他の生物への影響（無精子症や不妊症など）など、ここではその論議は避けますが、まだまだ解明されてはいません。

また、従来自家採種は株が他品種と交配しない隔離された地理的条件にある中山間地域を中心に、林業の副業のひとつとしてなされてきましたが、林業の衰退とともに過疎高齢化が一気に進み、国内での採種が